

相互の文化を尊重する態度を育てる 小学校社会科異文化理解学習 — 日本と中国の箸食文化に着目して —

永 田 成 文

Developing a Cross-cultural Understanding Unit to Cultivate Mutual Cultural Respect in Elementary School Social Studies: Focusing on the Gastronomic Culture of Chopsticks in Japan and China

NAGATA Shigefumi

〈Abstract〉

In the field of cross-cultural understanding learning in elementary school social studies, students' cultural respect is no longer increasing. Therefore, this study aims to develop a cross-cultural understanding unit to enhance mutual cultural respect from the perspective of multiculturalism.

First, students catalogued the commonalities and differences of the gastronomic culture of chopsticks in Japan and China, thus developing mutual cultural understanding. Second, they considered the background behind the manner of chopsticks usage in Japan and China, focusing on the values of both countries. Last, the students determined ways of coping with the differences in this custom.

After learning, the students understood and respected their mutual cultures. The results reveal that the cross-cultural understanding unit can cultivate mutual cultural respect among students.

キーワード：異文化理解、文化の尊重、小学校社会、近隣諸国、箸食文化

1. 多文化共生の視点を踏まえた異文化理解学習の社会的要請

現代世界はグローバル化が進展し、世界の国々・地域の相互依存性がますます強くなっている。人類が平和に共存していくためには、世界各国の歴史・風土・生活様式・文化・人々の生き方・考え方等の相互理解が必要である。大津（2010）は、「国際理解教育を「国際化・グローバル化した現代世界/社会の中で生きていくために必要な資質や能力を育成する教育」と定義し、人権の尊重を基盤として、現代世界の基本的な特質である文化的多様性および相互依存性への認識を深めるとともに、異なる文化に対する寛容な態度と、地域・国家・地球社会の一員としての自覚をもって、地球的課題の解決に向けてさまざま

なレベルで社会に参加し、他者と協力しようとする人間を育成することを示している⁽¹⁾。

『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』(2016)では、社会科・地理歴史科・公民科の社会系教科において、「伝統・文化等に関する様々な理解を引き続き深めつつ、将来につながる現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直しを図ることが必要である」としている。具体的には、日本と世界の生活・文化の多様性の理解や地球規模の諸課題や地域的な諸課題の解決について考察する力を身に付けるなど、グローバル化への対応と持続可能な社会の形成が強調されている。新学習指導要領では、小・中学校社会科や高等学校地理歴史科・公民科の目標において、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる」資質・能力の育成が明示され、文化的多様性の理解がより重視されたといえる。

社会系教科が対象とする文化は、様々な地域で人々が継承している人間活動にかかわる。本研究では、文化の定義として、「後天的に獲得され、集団成員によって分有され、世代を通して継承されていくような行動様式と価値観である」を採用する⁽²⁾。戦後、国際平和のためにユネスコを中心に国際理解教育が推進された。日本ユネスコ国内委員会は国際理解教育の中に異文化理解教育の内容を位置付けてきた。小原(2006b)は、社会科で行う国際理解学習について、①文化理解アプローチ、②国際化理解アプローチ、③問題解決アプローチの3つを挙げ、①の文化理解アプローチの内容として、「異文化理解」「多文化理解」「文化間理解」を示した⁽³⁾。本研究では、異文化理解学習を「多文化共生の視点を踏まえた文化理解アプローチに関わる内容を追究する学習」ととらえたい。

1998年の教育課程審議会答申において、「広い視野を持って異文化を理解し、異なる文化や習慣を持った人々と偏見を持たずに自然に交流し生きていくための資質や能力の育成を図る」という、多文化共生の視点からの異文化理解学習の必要性が示された。小学校社会科第6学年の内容「我が国と経済や文化などの面でつながりが深い国の人々の生活の様子」では、外国の人々と共に生きていくためには異なる文化や習慣を理解し合うことが大切であるとし、衣・食・住の特色や行事や学校生活とともに、あいさつやマナー等の習慣を取り上げることで、外国の人々のものの見方や考え方を理解し、尊重することにつながると示され、多文化共生を視点とした異文化理解学習が前面にだされた⁽⁴⁾。また、異文化理解の概念は、単なる知識・理解のみではなく、考え方や態度も含むようになってきた。

本研究の目的は、グローバル化に対応した多文化共生の視点を踏まえた小学校社会科における異文化理解学習を開発し、その改善への示唆を得ることである。研究方法として、多文化共生の視点から従来の異文化理解学習の現状と課題をとらえ、課題を克服する学習論を基に開発した異文化理解学習を実践し、その有効性を検証した上で、評価を行う。

2. 小学校社会科における異文化理解学習の現状と課題

2. 1 表層文化の理解

小学校社会科における異文化理解学習の現状について、第6学年の内容「我が国と経済や文化などの面でつながりが深い国の人々の生活の様子」に対応する教科書記述を見ていく。永田（2010）は、文化の面で関係が深い中国を事例として分析し、その内容が中国からの食物や習慣の伝播が中心となり、日本との経済関係が強調されているため⁽⁵⁾、小学校段階では、言語、宗教、衣・食・住、習慣、学校生活、遊びなどの生活文化を取り上げることを提言した。現行学習指導要領では、多文化共生の視点から異なる文化や習慣を理解し合うことを目的として、衣・食・住や行事などの人々の生活の様子を調べるようになっている。しかし、教科書では文化の伝播や紹介が中心で、文化事象の知識の獲得にとどまるため、多文化共生の視点から文化を尊重するという学習指導要領の理念との乖離が見られる。

瀬田（2007 a）は、衣・食・住などの目に見える「外面的文化要素」と価値観・価値志向などの目に見えない「内面的文化要素」があることを示した⁽⁶⁾。これらは異文化コミュニケーションの構造のとらえ方では表層文化と深層文化と表現される。多文化共生の視点を踏まえた異文化理解学習となるためには、表層文化の日本との共通点や相違点のみを対象とするのではなく、深層文化についても取り上げていく必要がある。

また、教科書では、文化の面でつながりが深い国として、中国や韓国を取り上げる場合でも、日本へどのような文化が伝わっているのかという文化の伝播の事実や文化の交流が強調されている以外は、アメリカ合衆国などの経済的な面でつながりが深い国々を取り上げる場合とほぼ同様の学習内容となっている。中国や韓国などの日本の近隣諸国は、大枠では東アジア文化圏であり、個々の文化事象を取り上げても文化圏を形成していることが多い。永田他（2006）は、小学校社会科異文化理解学習において近隣諸国の文化事象を取り上げる場合、同じ文化圏であることを意識して、文化の交流実態から一般的共通性と地方的特殊性をつかむ必要があることを示した。異文化理解は本来、他文化と自文化の理解が含まれる。対象地域が近隣諸国の場合は、外からの視点からではなく、同じ文化圏として内からの視点から異文化をとらえていき、相互の文化を理解することが求められる。

2. 2 相互の文化理解を踏まえた相互の文化の尊重

世界の国々・地域には、様々な自然・社会環境を背景として、日本と共通する文化や独自の文化が存在することを認識するだけでは、異文化の尊重につながりにくい。異文化の尊重につなげるためには、学習者が日本（自己）の視点から異文化をとらえるとともに、外国（相手）の視点から異文化をとらえ、それを評価することによりそれらが合理的な考

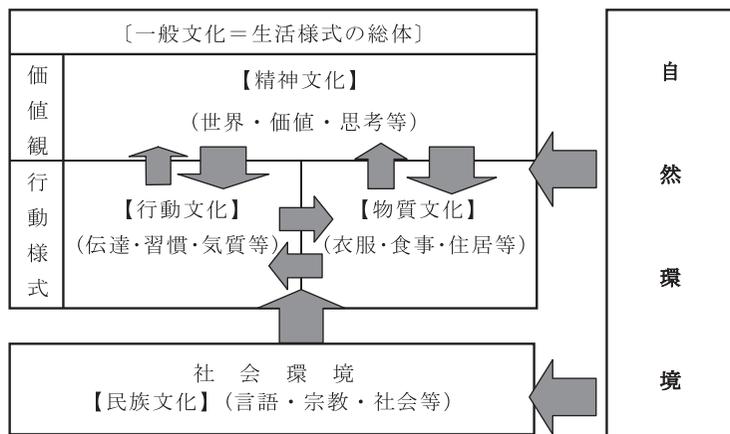
え方に基づいているととらえる必要がある。石井 (2001) は、異文化コミュニケーションの立場から、共感を「ある人の考えていること、感じていることなどを自分自身の中に移し替え、その人の内的世界と似た世界を作り出していくこと」とし、相互に相手の文化を学習するために、異文化の人たちの感情や考えを知的に理解するだけでなく、それらを体験として共有でできることが大切であるとしている。相手の文化に共感することができれば、異文化の尊重につながると考える。特に、文化的なつながりが深い近隣諸国の異文化理解学習においては、相互の文化理解し、文化の合理性に気づき、共感することで相互の文化の尊重につなげたい。

学習者が相手国の文化に共感して、異文化の尊重につなげた異文化理解学習として、臼井 (1992) の実践がある。近隣諸国である韓国の衣・食・住ばかりでなく、「立て膝は行儀が悪いか」という食事のマナーを取り上げ⁽⁷⁾、お互いの価値観を意識して、一緒に食事をしたらどうするかという行動様式への対応を話し合うことで、学習者に共感が芽生え、相互の文化の尊重を踏まえて多文化共生の方策を考えることに成功している。マナーへの共感を通して多文化共生の方策を考える画期的な異文化理解学習の実践であるが、近隣諸国としての相互の文化理解の視点や食事を事例とした表層文化と深層文化との関連付けが弱い。

3. 相互の文化を尊重する態度を育てる小学校社会科異文化理解学習

3. 1 内容論

相互の文化を尊重するためには表層文化ばかりでなく深層文化も取り上げる必要がある。永田 (2009) は文化人類学の文化のとらえ方や異文化コミュニケーションの文化の構成要素を基に、一般文化の構造を自然環境との関係から示した (図 1 参照)。



※矢印は影響の方向を示す。永田 (2009, p.3) より再掲

図 1 文化構造と自然環境との関係

民族文化と物質文化が“人間活動の成果”としての表層文化、行動文化と精神文化が“文化を継承した人間”としての表層文化と深層文化のそれぞれに該当する。

松岡他（2011）は、小学校段階の異文化理解において価値観や価値志向の「内面的文化要素」をそのまま学習対象とするのではなく、多様な価値観を内存する文化要素を対象とする必要性を示した。小学校段階では、対象地域の人々の生活全般に関わる衣・食・住と年中行事、学校の様子や遊び等の物質文化が主な対象となる。さらに、物質文化と精神文化をつなぐ行動文化に着目し、その背景を追究することで、人々の考え方や価値観などの精神文化をとらえていく。相手の文化尊重でとどまるのではなく相互の文化の尊重ができるようになるために、児童に生活の中で身近なものであり、対象となる近隣諸国とともに同じ文化圏を形成し、表層文化と深層文化をつなぐ文化事象を取り上げる。

3. 2 方法論

学習者に相互の文化を尊重する態度を育成するためには、学習者が日本（自己）の視点から異文化をとらえるとともに、外国（相手）の視点から異文化をとらえ、自国の文化を顧みて、相手国の文化に対して共感することが必要となる。また、表層文化を基にして深層文化をとらえるために、衣・食・住などの物質文化を取り上げて、その背景として、それらが地域の自然に適応したり、人々が工夫したり、合理的な考え方に基づいていることなどをとらえる。さらに、マナーなどの行動文化を取り上げて、その背景にある精神文化である価値観をとらえ、共感を基に歩み寄りを考えていく必要がある。

小原（1996 a）は、異文化理解の方法として、基本的な「問い」と「活動」を設定することを示している。具体的には、「どのように、どのような」と問い、事象の過程や特色を記述する活動、「なぜ、どうして」と問い、目的と手段、条件と結果、原因と結果の関係の推論によって説明する活動、「どうしたらよいか、なにをなすべきか」と問い、目的を実現するための最も合理的な手段・方法を判断する活動である。

永田（2009）は、この問いと活動の流れを、①対象地域の異文化を認識する、②認識した異文化の背景を追究する、③異文化を尊重しながら対応するという思考のプロセスに対応させた。これを、文化圏と相互の文化の尊重を意識して改善したものが表1である。

表層文化を対象とする場合、①で物質文化を取り上げ、②でその背景を自然条件や社会条件から考える。深層文化を対象とする場合、①で行動文化を取り上げ、②でその背景として精神文化である人々の価値観を意識し、③で人々の価値観に共感して行動文化への対応を判断することで相互の文化を尊重する。

表 1 異文化理解のプロセス

| プロセス | 問 い | 活 動 |
|------------|--------------------------------|----------------------------|
| ①異文化の認識 | 「同じ文化圏の日本の文化とどのような違いがあるのか」 | ○自己の文化と比較した際に浮き彫りになる異文化の記述 |
| ②異文化の背景の追究 | 「同じ文化圏の日本の文化となぜそのような違いが生まれるのか」 | ○異文化が存在する背景・理由・条件・原因の説明 |
| ③異文化への対応 | 「共に生きていくために違いにどのように対応すればよいか」 | ○異文化への対応が求められる場面での判断 |

※永田 (2009, p.4) より文化圏と相互の文化の尊重の視点から一部改善して作成

3. 3 授業構成

瀬田 (2007 b) は、「異文化理解の中心的概念要素」は、「異文化の知識理解」、「自文化の知識理解」、「相互の文化の容認と尊重」、「異文化との共存・共生」の 4 項目から構成され、実践の順序として、第一段階は文化の知識理解 (異文化・自文化の知識理解)、第二段階は相互の文化の容認と尊重、第三段階は異文化との共存・共生となることを示した。

社会科異文化理解学習として衣・食・住などの様々な表層文化を取り上げる。また、上記の三段階を相互の文化を尊重する態度を育てる異文化理解学習の学習過程の基本に据える。第一段階に対応して、同一の文化圏であることや、表層文化である物質文化をとらえ、その背景を考える。第二段階に対応して、表層文化である行動文化を通してその背景を考えることで深層文化である精神文化をとらえる。第三段階に対応して、精神文化を背景とする行動文化についての対応を考える。このように様々な表層文化からその背景を考えることで深層文化をとらえていく。

4. 小単元「日中両国の箸食文化を考える」の開発

4. 1 学習内容

箸は毎日の食事で必ず使う物であり、児童に身近なものである。日本と中国は同じ箸食文化圏であるが、「長さ」「太さ」「箸先」に違いがみられる。その背景には、中国では大皿料理をみんなで分け合って食べるが、日本では一人ひとりのお膳に料理をもって食べるという違いが存在する。中国では遠くにある料理をとるために箸が長く、先が太い。これは中国では汁物が多く、箸と蓮華を一緒に使うこととも関連している。

日本と中国は同じ箸食文化圏に属しているため、同じようなマナーがたくさん存在している。例えば、「渡し箸」「刺し箸」「たたき箸」などは、日本でも中国でもタブーとされている。一方で、「箸渡し」は火葬の後で死者の骨を拾う時に同じ動作をするので縁起が

悪いとされているため日本ではタブーであるが、大皿料理をみんなで分け合って食べる中国では普通の行為である。麺を食べる時の「すする音」に関しては、日本では香りやのど越しを楽しむものであったことからよいとされてきた。しかし、中国では、箸とともに蓮華を使って食べるため、麺類を食べる際にもすする音を立てて食べることはタブーとされている。

田山（2006）は、手食・箸食・フォーク食の文化圏をとらえ、箸食と手食の習慣について調べ、その背景を考え、精神文化を視野に入れた実践を行った。しかし、同じ箸食文化圏の中での、相互の文化理解や文化の尊重までは意図していない。本研究では、日本と近隣諸国の中国の箸食文化に着目し、箸食のマナーとその背後にある価値観を考察していく。

4. 2 学習方法

日本と中国の箸を使ってみることで道具としての箸の共通点と相違点を実感させ、作法に関係していることや、日本と中国人の食事の様子からマナーの共通点と相違点を実感させ、それぞれの背景を考え、文化摩擦への対応を考える。

具体的には、まず、表層文化である箸と代表的な料理の違い（道具/作法/料理）について、実際に日本と中国の箸を使った後で、道具としての箸やその使い方や料理を比較する。次に、深層文化とかわり、日本の嫌い箸と中国の嫌い箸を予想して確認し、日本人と中国人の立場をとらえる行動様式のビデオを活用し、日本と中国のマナー違反（箸渡しとすする音）の背景を考えることで価値観をとらえ、両国の人が一緒に食事をするときの対応を判断する。

4. 3 単元目標と授業展開

開発した単元「日中両国の箸食文化を考える」（2h）は、津市立栗真小学校第5学年9名と第6学年の12名を対象として⁽⁸⁾、2015年6月11日（木）に実施した⁽⁹⁾。

単元目標は「日中の箸食文化の共通点と相違点とその背景を認識し、相互の文化を尊重する態度を育てる」である。

第1時「日本と中国の箸と代表的な料理との関係」では、箸そのものや箸の使い方をとらえていく。まず、手食・箸食・フォーク食の文化圏について確認していく。生活様式として、日中両国の道具としての箸やその使い方や代表的料理を比較することから、箸食文化の共通点と相違点をとらえる。

第2時「日本と中国の箸食のマナーと価値観」では、行動様式である日中両国の箸食のマナーの共通点と相違点の背景を考え、それぞれの価値観をとらえる。日本人と中国人の食事の様子を撮影したビデオを使い、日本では箸渡し、中国ではすする音がタブーであることをおさえ、両国の人が一緒に食事をする際の配慮を考える。

以下に第 1 時と第 2 時の目標と展開を示す (表 2・表 3 参照)。

○第 1 時の目標と指導計画

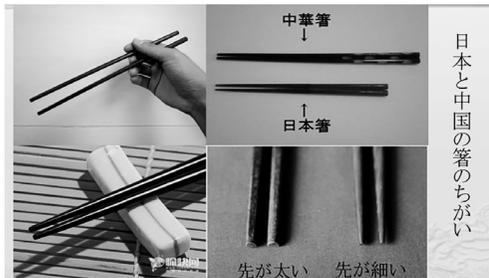
- ・日本と中国の箸の比較から箸の機能や箸の使い方の共通点と相違点を見つけることができる。
- ・日本と中国の食事の様子と配膳の仕方の比較から料理と箸との関係を考えることができる。

表 2 第 1 時「日本と中国の箸と代表的な料理との関係」の展開

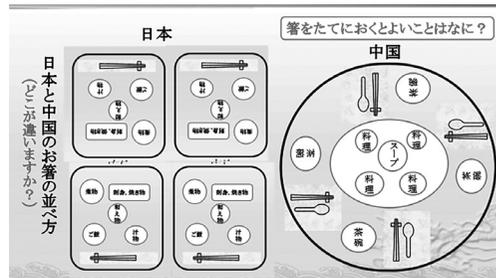
| | 学習項目 | 主な発問・指示 | 学習活動 | 指導上の留意点 | 資料 |
|----------------|---------------------------------|---|---|--|---|
| 文化圏を意識する段階 | ○ご飯の食べ方 | ○「みなさんは何を使ってご飯を食べますか」 ○「箸以外の料理の食べ方を知っていますか」 | ○ご飯の食べ方について発表する。 ○他の食べ方を図で確認する。 | ○主に食事の時に箸を使っていることを確認する。 ○手食とフォーク食などの料理の食べ方を確認させる。 | ○料理の食べ方の図 |
| | ○世界の食文化圏 | ○「手食・箸食・フォーク食の食べ方は、それぞれの国でされているでしょうか」 ○「3 種類の食べ方の始まりとその様子を確認しましょう」 | ○手食・箸食・フォーク食の国々を予想して、地図で確認する。 ○文と写真から食べ方の由来と食事の様子をつかむ。 | ○世界の手食・箸食・フォーク食の文化圏と主要国 (南アジア・アフリカ/東アジア/欧米等) を確認させる。 ○手食・箸食・フォーク食の由来と、各文化圏での食べる様子と 3 種類の食べ方の関係を確認させる。 | ○3 種類の食べ方をする文化圏の地図 ○食べ方の由来の文 ○食事の様子の写真 |
| 異文化と自文化をとらえる段階 | ○箸食文化圏である日本と中国の箸の違い【物質】 | ○「日本と中国の箸を比べて同じ点と違う点を見つけましょう」 ○「日本と中国の箸を実際に使ってみましょう」 ○「日本と中国の箸を使ってみて気づいたことがありますか」 ○「日本と中国の箸の特徴を確認していきましょう」 | ○写真から両国の箸の違いを見つけて発表し、実物で確認する。 ○両国の箸で小豆 (小さい) とお手玉 (大きい) つかみをする。 ○箸の体験をもとに気づきをワークシートに書く。 ○写真か両国の箸の特徴をつかむ。 | ○同じ箸食文化圏でも、箸の長さ・色・形が異なることや中国には子ども用の箸がないことに着目させる。 ○グループで体験することで長さや太さを実感させ、中国の蓮華や大皿料理を分け合うことにつなげる。 ○箸そのものについてと使いやすさについて意識させ、記入させる。 ○日本と比べて中国の箸は長く先が太いこと、中国では子どもも大人も同じ箸を使うことを確認する。 | ○日本と中国の箸の写真 ○箸の実物 ○小豆とお手玉と日本と中国の箸 ○ワークシート1 ○日本と中国の箸を使う様子の写真 |
| | ○日本と中国の代表的な料理と箸との関係【物質】 【行動】 | ○「日本と中国の一日の食事の様子を見てみましょう」 ○「中国の箸と料理にはどのような関係がありますか」 | ○写真から両国の一日の三食の食事の内容を比較する。 ○中国の食卓の写真から箸の特徴をもとに考える。 | ○中国では主に毎朝お粥であること、夕食は毎日、皆で円卓を囲んで食べること、箸と蓮華が一緒に使われていることを確認する。 ○特に夕食に注目させ、長い箸であれば、遠くにある大皿に盛られた料理が取りやすいことをおさえる。 | ○日本と中国の一日の食事の写真 ○中国の夕食の食卓の様子 |

| | | | | |
|-------|---|--|---|---|
| | <p>○「中国の箸と蓮華を一緒に使うとよいことは何でしょう」</p> <p>○「中国で箸を縦に置くとよいことは何でしょう」</p> | <p>○写真で中国の料理と蓮華を確認し、料理との関係を考える。</p> <p>○図で日本と中国の料理の配置を確認して、料理との関係を考える。</p> | <p>○中国の料理は汁物が多く、水餃子は日本のように箸の先が細くなくても、蓮華を使って食べることができることをおさえる。</p> <p>○日本では個々に配膳され橋は横置きであるが、中国では大皿料理を取りやすいように縦置きで、円卓から落ちにくいことをおさえる。</p> | <p>○箸と蓮華の写真</p> <p>○蓮華の実物</p> <p>○日本と中国の箸の配膳の仕方の図</p> |
| ○振り返り | ○「日本と中国の箸食文化についてわかったことを書きましよう」 | ○1時間目を振り返り、興味を持ったことをワークシートに書く。 | ○同じ箸食文化圏であることを再度おさえ、日本と中国の箸食の共通点と相違点をまとめさせる。 | ○ワークシート2 |

※学習項目【 】は図1の文化の構成要素を示す。当日の指導案の趣旨を変えない範囲で筆者が改善して作成



資料1 日本と中国の箸の写真



資料2 日本と中国の配膳の仕方の図

○第2時の目標と指導計画

- ・相手の文化を尊重して中国の人と一緒に食事をする際に気をつけることを考えることができる。
- ・日本と中国の箸食文化のマナーについての共通点や相違点とその理由を考えて表現することができる。

表3 第2時「日本と中国の箸食のマナーと価値観」の展開

| 学習項目 | 主な発問・指示 | 学習活動 | 指導上の留意点 | 資料 |
|-------------------|-------------------------------|-------------------------------|--|-------------|
| ○正しい箸の持ち方と使い方【行動】 | ○「お箸の正しい持ち方と正しい箸の使い方を確認しましょう」 | ○アンケートの解答から正しい箸の持ち方と使い方を確認する。 | ○事前アンケートを思い出させ、箸の正しい使い方をおさえ、持ち箸・仏箸・指さし箸が正しくない（嫌い箸）理由を説明する。 | ○事前アンケートの解答 |
| ○日本の箸のマナー【行動】 | ○「これらはどれが嫌い箸でしょうか」 | ○4つの箸のマナーは嫌い箸かを予想し、嫌い箸を×で示す。 | ○わたし箸、さし箸、たたき箸、箸渡しは全て日本の嫌い箸であることをおさえ、他の嫌い箸も紹介する。 | ○日本の嫌い箸の図 |

| | | | | | |
|------------------|--|--|--|--|--|
| 異文化と自文化の背景をつかむ段階 | | ○「これらの嫌い箸はなぜやってはいけないのでしょうか」 | ○4つの箸のマナーが嫌い箸となる理由を考える。 | ○順に食事の終わりを意味する、見た目と火の通り具合を疑っている、食器を傷つける、火葬後の骨上げを連想させることをおさえる。 | |
| | ○日本と中国のテーブルマナーの共通点と相違点【精神】 | ○「日本の嫌い箸は中国でもやってはいけないのでしょうか」 ○「日本の人と中国の人が一緒に食事をする様子を見ましょう」 | ○4つの箸のマナーは中国でも嫌い箸なのかを予想し、写真からすすむ音が許されるのかも考え、図から共通点と相違点を確認する。 ○ビデオから両国のテーブルマナーの共通点と相違点を探す。 | ○日本では嫌い箸となる4つの箸のマナーは中国でも同様に嫌い箸となるのか、日本で許される音をすすむ音は許されるのか予想させ、日本と違い、橋渡しは許されること、すすむ音は許されないことをおさえる。 ○食事の様子から日中の共通点(渡し箸、刺し箸、たたき箸)と相違点(箸渡し、すすむ音)を確認する。 | ○日本の嫌い箸の図 ○ラーメンをすすむ写真 ○テーブルマナーの異同の図 ○自作ビデオ |
| | ビデオの内容：円形テーブルで日本と中国の人が大皿料理で食事をしている。日本の人が麺類を音を立てすすむと中国の人が注意、中国の人が箸渡しで料理を取り分けると日本の人が注意 | | ○「なぜ中国では箸渡しはよいのでしょうか」 ○「なぜ日本ではすすむ音を出してもよいのでしょうか(なぜ中国ではだめなのか)」 | ○中国の立場に立って価値観を考える。 ○日本の立場と中国の立場から価値観を考える。 | ○日本はお葬式を連想させるため駄目であることをおさえ、中国は料理を大皿に盛って取り分け、みんなで食べることを大切にしていることを確認する。 ○中国には蓮華があることをおさえ、日本は喉ごしと音を楽しむこと、中国は静かに口に入れることを大切にしていることを確認する。 |
| 異文化へ対応する段階 | ○日中両国の箸食文化に対する配慮【行動】 【精神】 | ○「中国での生活と箸の関わりを見ましょう」 ○「日本で中国のひとと食事をする時にどのようなことに気をつけていきたいですか」 | ○ビデオから中国の箸に対する考え方をつかむ。 ○写真から中国のひとと食事をする時の対応をワークシートに書き、発表する。 | ○中国では子どもの頃から自分で箸を使い、年上の人が先に箸をつけてから食事を始め、箸で料理を取り合い家族のきずなや愛を強めていることを確認する。 ○日本の中華料理店での食事時の対応を考えさせ、中国だけでなく日本の文化にも配慮するとお互いに気持ちよいことを導き出す。 | ○中国のコマースシャル(You Tube) ○日本の中華料理店の写真 ○ワークシート3 |
| | ○振り返り【物質】 【行動】 【精神】 | ○「中国と日本の食文化について思ったことは何ですか」 ○「2時間の授業の感想を書きましょう」 | ○両国の食文化で学んだことを振り返る。 ○感想をワークシートに書く。 | ○2時間の授業の流れを簡単に振り返った後、学んだことを意識させる。 ○2時間の授業の感想を書かせる。 | ○ワークシート4 |

※学習項目【 】は図1の文化の構成要素を示す。当日の指導案の趣旨を変えない範囲で筆者が改善して作成



資料3 テーブルマナーの異同の図



資料4 日本の中華料理店のテーブルの写真

5. 授業の分析

5. 1 記述式ワークシート

2時間の授業で次のことをワークシートに書かせ、その結果を示したものが、表4である。

【1時間目】

- 1 中国と日本のはしを使って気づいたことを書きましょう。
- 2 日本と中国のはし食文化についてわかったことを書きましょう。

【2時間目】

- 3 日本にある中華料理店で中国の人と食事をするときに気をつけることを書きましょう。
- 4 2時間の授業を受けた感想を書きましょう。

表4 ワークシート記述の結果（5年生9名・6年生12名 計21名）

| | |
|-------------------------------------|---|
| 1. 中国と日本の箸を使って気づいたことを書きましょう。複数回答 | |
| ○長さ | : 日本と比較して中国は長い、中国は長いので使いにくい[実感] |
| ○形 | : 日本は先が斜め、中国は先が太い、日本は使いやすい[実感]、中国は難しい・すべる[実感] |
| ○用途 | : 日本は小さいもの[実感]、中国は大きいもの[実感] |
| 2. 日本と中国の箸食文化についてわかったことを書きましょう。複数回答 | |
| 【テーブル】 | : 中国はテーブルが丸い(回る) 6+1=7 : 日本はテーブルが長方形で横置き 0+2=2 : 日本はテーブルが長方形 1+0=1 : 中国はテーブルが丸く縦置き 0+1=1 |
| 【箸の置き方】 | : 中国ではすぐとれる(食べる)ように箸を縦に置く[作法背景] 3+5=8 : 日本は箸を人に向けない(横置き)[作法背景] 1+3=4 : 中国では(丸テーブルで)落とさないように箸を縦に置く[作法背景]0+4=4 : 中国の箸の置き方(縦置き) 3+0=3 : 日本は横、中国は縦に置く 0+2=2 |
| 【箸の長さ+形】 | : 中国は大人も子どもも同じ箸 1+1=2 : 中国の箸はとりやすいように長い[作法背景] 1+0=1 : 日本の箸は先が長くて、中国は太い 0+1=1 |
| 【食事の様子】 | : 中国の食事に汁物(スープ)が多い 4+1=5 : 中国に(箸と)蓮華 2+1=3 : 中国の水餃子 1+0=1 : 日本は個人で、中国は分け合って 0+1=1 |

| |
|---|
| <p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> : 両国のマナー 2+1=3 : 両国は箸を使う 1+1=2 : 中国の箸は使いづらい 1+0=1 : 中国の箸に工夫 1+0=1 : 同じ文化圏 1+0=1 : 両国は食べやすいように工夫 1+0=1 : 箸に種類がある 0+1=1 |
| <p>3. 日本にある中華料理店で中国の人と食事をするとときに気をつけることを書きましょう。複数回答</p> <ul style="list-style-type: none"> ○中国のマナー (すする音) をしないように食べる[自分] 6+5=11 両国のマナーを守る[自分] 0+4=4 日本では日本のマナー、中国では中国のマナーを守る[自分+相手] 0+3=3 中国も日本のマナーも守る[自分] 3+0=3 中国のマナー (ルール) に合わせる[自分] 3+0=3 日本は中国のマナー (すする音) を中国は日本のマナー (渡し箸) を守る[自分+相手] 0+2=2 中国のマナーを守る[自分] 1+0=1 中国と日本の嫌い箸をしない[自分] 1+0=1 ○中国と日本のマナーを教え合う[自分+相手] 3+0=3 中国の食べ方を教わる[自分] 1+0=1 ○橋渡しをしないように皿を渡す[自分] 0+1=1 橋渡しは日本ではダメで中国ではよいので皿に入れてもらう[自分] 0+1=1 |
| <p>4. 2 時間の授業を受けた感想を書きましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○中国では大人と子どもの箸が同じで太いが、日本は橋先が細い[両国文化知識理解] 2+1=3 ○日本と中国の箸のマナー (長さ+形+置き方+餃子) が違う[両国文化知識理解] 4+1=5 中国の箸の置き方などを知った[文化知識理解] 1+0=1 ○中国は橋渡しがよい[文化知識理解] 2+0=2 日本は橋渡しがいけないが中国ではよい[両国文化知識理解] 0+1=1 日本と中国は同じ箸を使いマナーは同じと思っていたが違った[両国文化知識理解] 0+1=1 中国のマナーでは日本でやっているすすることがいけない[両国文化知識理解] 0+1=1 日本では橋渡しはいけないが中国ではよい[両国文化知識理解] 0+1=1 マナーが思ったより多かった[文化知識理解] 0+1=1 箸の使い方の文化が分かった[文化知識理解] 0+1=1 ○日本は子どもが簡単にできるが中国は教え箸がないので大変[両国文化知識理解+共感] 0+1=1 長い箸で中国の子どもは可哀想。マナーが違う[両国文化知識理解+共感] 0+1=1 ○中国の箸が長い、日本と中国のマナーは似ているから守れる[両国文化尊重] 0+1=1 箸を使う国のマナーが違う、箸のマナーは守れていてよかった[自国文化尊重] 0+1=1 |

※ [] はそれぞれの項目の補足説明、下線は尊重、数字の左が 5 年生、右が 6 年生の人数を示す。著者作成

項目 1 では、箸の使用の実体験の効果をみることができる。写真でも、箸の長さ・形はわかるが、実際に箸を使い比べて、使いやすいか、どの用途に向いているかを実感的に理解することができている。また、実体験によって、同じ箸食文化圏であるが違いがみられること、すなわち異文化と自文化の実感的理解ができている。また、この実体験が中国の箸と蓮華の使用の解明や項目 2 とかかわる箸の違いの背景の追究につながっていく。

項目 2 では、表層文化としてどのような箸食文化をとらえたのか、その箸食文化の合理

相互の文化を尊重する態度を育てる小学校社会科異文化理解学習－日本と中国の箸食文化に着目して－

的な背景をとらえることができているのかをみることができる。児童は箸食文化の箸そのものより、マナーである箸の置き方に興味を持ち、その理解が深まったことがわかる。具体的には、日本では箸は横置きであるが、中国では箸は縦置きであるという事実とともに、その背景を食事のあり方やテーブルの形などから合理的な文化としてとらえていることがわかる。特に6年生は箸そのものや箸食マナーの背景をとらえる傾向にあることがわかる。同じ箸食文化圏で相互の文化理解を踏まえた上で、お互いに合理的な理由があることをつかむことにより、相互の文化の尊重につながっていく。

項目3では、日中両国の箸食に関する表層文化であるマナーと深層文化である価値観をとらえた上で、どう行動するかを考えることでお互いの文化を尊重できるかについてみるることができる。トラブル（文化摩擦）とならないように、中国のマナーや日本と中国のマナーを守ろうとしていることがわかる。また、一部であるがマナーを教え合うやマナー違反とならないように皿を渡すなどお互いの文化を尊重した具体的な行動が提案できている。特に6年生は、自分ばかりでなく相手の立場を踏まえていることがわかる。

項目4では、2時間でどのような学びができているのかをみることができる。箸食や箸食のマナーの知識理解が中心であるが、ほとんどの児童が相互の文化理解ができている。一部の児童は文化への共感や行動を記しており、文化の尊重につながっているのがわかる。

5. 2 選択式ワークシート

2時間の授業後にアンケートをとり、その結果を示したものが、表5である。

| |
|---|
| ① 中国の食文化をもっと知りたくなった。【 】 |
| ② 日本の食文化をもっと知りたくなった。【 】 |
| ③ 中国の食文化を尊重（大切に）したくなった。【 】 |
| ④ 日本の食文化を尊重（大切に）したくなった。【 】 |
| ア. とても思う：3 イ. 思う：2 ウ. あまり思わない：1 エ. 思わない：0 |

表5 アンケートの結果（5年生9名・6年生12名 計21名）

| | ①中国文化知識 | ②日本文化知識 | ③中国文化尊重 | ④日本文化尊重 |
|---------|---------|---------|---------|---------|
| 5年（9名） | 2.33 | 2.33 | 2.00 | 2.56 |
| 6年（12名） | 2.17 | 2.33 | 2.00 | 2.33 |
| 計（21名） | 2.24 | 2.33 | 2.00 | 2.43 |

※数値はア～エに対応するポイントの21名の平均値を示す。著者作成

①と③の中国の知識と尊重の項目を比較すると、5年生で3名は知識より尊重の選択が低く、2名は高く、4名は同じになる回答であった。6年生で4名は低く、4名は高く、4名は同じになる回答であった。②と④の日本の知識と尊重の項目を比較すると、5年生で2名は知識より尊重の選択が低く、4名は高く、3名は同じになる回答であった。6年生で、2名は低く、2名は高く、8名は同じになる回答であった。

アンケート結果から、文化の理解では若干日本文化のポイントが高く、児童は両国の文化のことをさらに追究したくなることがわかる。文化の尊重では、日本の文化を尊重するという自国文化中心主義があると考えられ、特に5年生にその傾向が強い。しかし、平均値が2をこえていることから相互の文化を尊重しようとする態度が育っているといえる。

5. 3 授業の有効性

ワークシート記述とアンケートの結果から、日本と中国を1つの文化圏にとらえ、日本と中国のそれぞれの箸食文化の相互理解ができている。また、箸食の表層文化から背景を考慮することでお互いの文化が合理性をもっていることをつかめている。文化の尊重に関しては、お互いのマナーを守るという回答や中国文化より日本文化を尊重する傾向が強いため、相互の文化の尊重が十分になされていたとはいえない。しかし、マナーを教え合ったり、相手がマナー違反とならないように、多文化共生の視点から配慮することも考えている児童もみられるため、不十分ではあるが相互の文化を尊重する態度が育成できている。本研究で提案した授業は、相互に文化理解すること、相互に文化尊重することに有効性があるといえる。

6. 多文化共生へつながる異文化理解学習への示唆

本研究では、同じ文化圏という意識から、多文化共生の視点から相互の文化理解を踏まえて相互の文化を尊重する態度を育成する近隣諸国の異文化理解学習を提案した。日本と中国の箸食文化を取り上げ、自国ばかりでなく、相手の視点からもその背景や対応を考慮することで、異文化の認識が深まり、不十分ながら相互の文化を尊重する態度を育成できることを示した。

本実践の特色は、日本と中国の箸の違いを体験から実感させ、道具としての箸や作法の相違点の背景を考慮することでお互いの文化の合理性に気づかせるようにしたこと、日本と中国の行動文化であるマナーの背景を考慮することで価値観に気づかせたこと、その価値観を意識させて、多文化共生の視点を踏まえて行動を考えさせたことである。本実践は、多文化共生を視点とした小学校社会科における異文化理解学習の1つのモデルといえる。

本実践では、箸食文化への対応の場面で、「気をつけること」という配慮が前提であったため、安易に相手の文化を受け入れる傾向があった。また、話し合いの時間も短かった。より、多文化共生の視点から異文化を尊重する態度を育てる実践となるためには、臼井(1992)の実践のように、行動文化であるマナー自体が文化摩擦と児童が意識できる事例を取り上げ、十分な話し合いにより、共感をもとに対応を判断させていく必要がある。

【註】

- (1) 異文化理解と地球的課題という現代世界の諸課題の解決を重視している。大津和子(2010)「国際理解教育の目標と内容構成」日本国際理解教育学会編『グローバル時代の国際理解教育－実践と理論をつなぐ－』明石書店、p.28
- (2) 文化人類学の定義である。米山俊直(1991)「文化人類学を学ぶということ」米山俊直・谷泰編『文化人類学を学ぶ人のために』世界思想社、p.7
- (3) 文化理解アプローチについて、我が国と他国・他民族の人々の暮らしや生活文化の違いを比較して、なぜそのような違いが生まれるのかを探究していく学習、共通点から一般性を探究していく学習、それぞれの文化のよさを理解し合うためにはどうすればよいかを判断する学習を示している。
- (4) 平成10年版学習指導要領解説社会編(p.107)と平成20年版学習指導要領解説社会編(p.95)に示されている。平成元年版の小学校指導書社会編(p.73)では、「我が国と経済や文化の面でつながりのある国の人々の生活の様子などについて理解させる」と示されており、多文化共生の視点は明確に示されていなかった。
- (5) 採択率が高い平成17年版の東京書籍の教科書を分析した。現行学習指導要領に対応した平成23年版は学校生活、平成27年版は伝統行事の内容が充実し、経済発展と生活に関連づける内容に変化している。
- (6) 小学校で扱う文化項目として、「外面的文化要素」である、食べ物、衣服、住居、気候(人々の生活との関連)、学校の様子、遊びを挙げている。瀬田幸人「異文化理解教育で扱うべき文化要素について」岡山大学教育学部研究集録第134号、pp.131-135
- (7) 立て膝をテーマに3時間で実践している。韓国の立て膝は日本では行儀が悪いが、日本で行儀がよい正座は韓国では乞食の行動であるため、どちらかのマナーを優先すると文化摩擦が生じる。
- (8) 事前のアンケート調査から、同じ箸食文化圏である中国や韓国で箸が使われていると正確に知っている子どもは9名いた。知らないと答えた子どもも8名いた。また、箸の持ち方や置き方などのマナーは全員正解であったが、箸の使い方のマナーは十分に理解していないことがわかった。
- (9) 大学院の授業「社会科教育特論演習Ⅱ」で、受講生の片山真理子、神保匡邦、WANG XIXI、TANG QUAN(日本人学生2名・中国人留学生2名)と指導案を共同で作成し、受講生4名が協力して授業を実施した。

【参考文献】

石井敏(2001)「相手の靴をはいてみる－感情移入・共感」古田暁・石井敏・岡部朗一・平井一弘・

- 久米昭元『異文化コミュニケーション・キーワード (新版)』有斐閣、pp.64-65
- 臼井忠雄 (1992) 『国際理解・日本と韓国 — 6 年・世界の中の日本』日本書籍
- 大津和子 (2010) 「国際理解教育の目標と内容構成」日本国際理解教育学会編『グローバル時代の国際理解教育 — 実践と理論をつなぐ —』明石書店、pp.28-39
- 小原友行 (1996 a) 「広島プロジェクトの 3 ヶ年の研究から学ぶもの — 異文化理解教育のカリキュラム開発の視点と方法 —」広島大学国際理解研究会『アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究』第 3 集、pp.VIII-12
- 小原友行 (2006 b) 「論争問題を取り上げた国際理解学習の開発」小原友行編『論争問題を取り上げた国際理解学習の開発』明治図書、2006、pp.9-16
- 瀬田幸人 (2007 a) 「異文化理解教育で扱うべき文化要素について」岡山大学教育学部研究集録第 134 号、pp.129-139
- 瀬田幸人 (2007 b) 「小学校における理想的な異文化理解教育の実践について — 外面的文化要素の観点から —」岡山大学教育学部研究集録第 135 号、pp.109-120
- 田山修三 (2006) 『『はし』と『手』、どちらが清潔なの — 箸食と手食のそれぞれのよさを通して —』小原友行編『論争問題を取り上げた国際理解学習の開発』明治図書、pp.48-63
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 (2016) 『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』
- 永田成文・夏著揚・増山稔 (2006) 「小学校の異文化理解学習における実体験の効果 — 日本の近隣諸国の食文化を事例として —」『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第 26 号、pp.19-24
- 永田成文 (2009) 「高等学校地理における異文化理解を深める文献調査学習 — 異文化交流の仮想体験を活用して —」『地理教育研究』No.5、pp.1-10
- 永田成文 (2010) 「発達段階に応じた文献調査による世界地誌学習」『地理教育研究』No.6、pp.8-14
- 松岡靖・中田晋介・古賀一博・朝倉淳 (2011) 「小学校の異文化理解に関わる認知的発達」広島大学教育学部附属学校共同研究機構研究紀要第 39 号、pp.93-98
- 文部科学省 (1999) 『小学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社
- 文部省 (1989) 『小学校指導書 社会編』学校図書
- 米山俊直 (1991) 「文化人類学を学ぶということ」米山俊直・谷泰編『文化人類学を学ぶ人のために』世界思想社、pp.3-13